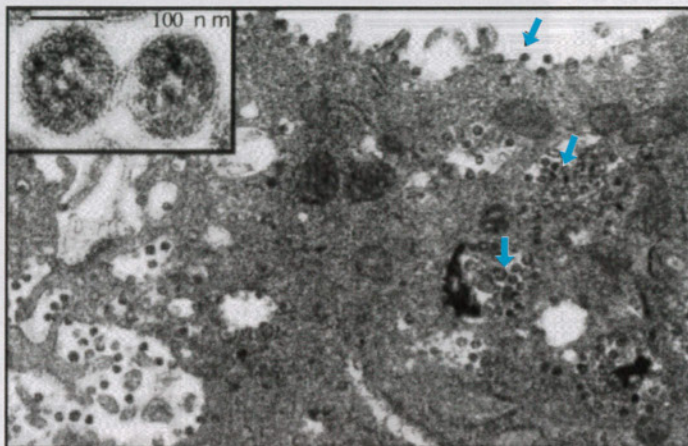


奈良県立医科大学学報

JULY
2003

vol.5



Vero細胞感染SARSウイルス (写真1)
細胞内では細胞質膜で形成された空胞内にウイルス粒子が存在し、細胞外では上皮表面に接着している像が拡大される

C	SARS拡散と院内感染に共通する危機管理意識の欠如……	1~2
	ホオジロ通信……	3
O	研究紹介 物理学/生化学/皮膚科学……	4~6
N	大学院医学研究科再編整備に向けて/管財課技術職員表彰……	7
	科研費内定状況……	8~9
T	看護短期大学部から……	10
E	看護部から/医師国家試験合格状況/ 看護師・助産師国家試験合格状況……	11
N	包括医療について/附属病院玄関前工事の実施……	12
	オープンキャンパスの実施/ 学術交流事業実施状況 (チェンマイ大学)……	13
T	レポート (将来計画委員会/教授会)……	14~15
S	14年度決算報告/平成15年度医師会学術奨励賞受賞/下ッ道(編集後記)……	16

SARS拡散と院内感染に共通する危機管理意識の欠如

細菌学講座 教授 喜多 英二

(奈良県立医科大学附属病院 院内感染対策委員会委員長)

本年2月中国政府は、前年11月頃より広東省で原因不明の異型肺炎が流行し、それまでに305名が発病し、5名が死亡したことを発表した。その後の本感染症の急速な広がり、国際的社会的問題への発展過程は、ご承知のとおりである。この事態を受けて、WHO（世界保健機関）は本年3月12日に、『重症急性呼吸器症候群(Severe Acute Respiratory Syndrome, SARS)』に関する緊急警告-Global Alert-を世界に向けて発信し、4月28日にはSARSを、国際保健規則で定める「最も危険な感染症」(WHOが発生源国の同意なしに、世界各国に警告を行える)に指定する方針を決めた。

今回のSARSに対する取り組みで注目すべきは、WHOとCDC（米国厚生省疾病管理・予防センター）が互いに競いながらも協調体制下で、迅速な疫学調査と病原体解明を成し遂げたことである。病原体については、CDCがコロナウイルスの新型がSARS病原体であると、3月24日に発表した。このウイルスはVeroE6細胞やFRhk-4細胞に細胞毒性を示すが、SARS患者の回復期血清でこの毒性が中和されること、同患者血清を用いた免疫蛍光抗体染色でコロナウイルス感染細胞内に同ウイルスを検出し得ること等から、最も有力な原因病原体と考えられている。SARS患者から分離されたこのウイルスは電子顕微鏡上コロナ

(2頁へ続く)

ウイルスとほぼ同一である（写真1）。しかし、遺伝子解析上は既存の3血清型のいずれのコロナウイルスともせいぜい70%の一致にとどまること、既存のコロナウイルスと異なりSARS患者は15歳以下には極めて希であること、さらに既存のコロナウイルスより遙かに長時間外界で生存し得ること、等の相違点の本ウイルスに存在する。そのため、WHO・CDCは本ウイルスをSARSウイルスと命名した。疫学調査においては、各国の協力のもと、マスメディアやインターネットを通して、日々の情報を世界中の人達が共有できるだけの国際的監視体制が迅速に確立し得たことが、SARS対策の強力な原動力となった。この点については、中国の情報隠蔽や開示の遅延が大きな問題となったが、これは『中国の政治体制に起因する、危機管理意識の欠如であり、医学・医療自体の遅れを意味するものではない』（Pak-Yin医師：香港大学医学部感染症科、e-mail 私信）との意見が聞かれる。

今回の流行で際だった特徴は、初期に大勢の医療従事者が犠牲になったことである。医療従事者にとっては、自らの感染防御が患者を守るために最低限の責務である。『医師は、全ての患者が未知の病原体を保菌している可能性を忘れてはならない』（ロベルト・コッホ）という、古くて今なお生き続ける基本姿勢を忘れていたことが、大きな悲劇を生み出した。国内の感染対策に目をむけると、



（写真2）

SARSウイルスの上陸阻止（水際作戦）に全勢力が注がれてきた。しかし、人も物も国境を越えて容易に移動できる今日においては、SARSウイルス上陸阻止の発想にはおのずと限界がある。水際作戦と同時に、国内患者発生時にいかに感染拡大を阻止するかに力を注ぐべきである。SARSウイルスの感染経路は飛沫・接触感染と考えられるが、今日もなお、空気感染を完全に除外しきれていない。そのため、現時点では標準的予防策（standard precaution）に加えて、飛沫・空気感染の予防策が求められている。幸いにも本学附属病院には空気感染に対応した簡易陰圧テント（写真2）が10ユニット導入され、C棟完成時には1類感染症対応の陰圧個室の2病室が稼働し得る。さらには、感染症対策に精通した専門医や看護師も常勤している。しかし、いくらハード面が充実しても、医療従事者一人一人の危機管理意識が生まれなければ、「最も危険な感染症」への対応は実現し得ない。

今回のSARS epidemicsは、14世紀に欧州全土を襲ったペストの恐怖を連想させる。『疫病は東方（中国南部地域）より来る』と、当時のヨーロッパ人は考えていたが、21世紀におけるSARSもペストと同じく彼らにとっては東方の地に発生した。感染症対策調査で私も何度か訪れたことのある中国南部には、多くの家畜・家禽、さらには爬虫類との共存生活、同居動物を食材とする生活様式、近代国家では受け入れられない劣悪な衛生環境が存在する地域が多い。WHOを始めとする諸外国の監視がなければ、ペストと同様の恐怖がこの地域から全世界に拡散していたかもしれない。一方、ベトナムではWHOや日本の支援で、いち早くSARS制圧に成功した。この差異は的確なサーベイランスに基づく情報公開と、医療スタッフ・行政人の危機管理意識の差に起因する。Nicolai院長（ベトナムフレンチ病院）は、『我々には、陰圧個室も完全な防御衣服もなかった。持ち合わせたのは、ベトナム戦争を経験した国民に根付く強い危機対応意識だけであった。しかし、正確・迅速な情報公開があるだけで、我々の危機対応意識は現代のペストを制圧するに十分であった』（e-mail 私信、5月14日）と述べられた。このことは、我々が日々直面する院内感染対策においても、サーベイランスと情報公開を迅速に実施し、全ての医療従事者が高い危機管理意識に基づきどんな状況下でも最低限標準予防策を実践し得ることが、いかに重要であるかを物語っている。

謝辞：本学附属病院でのSARS対策が、吉岡病院長の指揮のもと、三笠医師（内科学第二講座助教授）を始めとする院内感染対策委員会メンバー諸氏、及び大学・附属病院事務局の多大なるご尽力により、迅速に確立し得たことに、院内感染対策委員長として厚く御礼申し上げます。

『教育は交互作用的な営みである』

学長 吉田 修

今西錦司さんは、「棲み分け理論」やダーウィンの正統派進化論に対峙する「今西進化論」で有名な人類学者であるが、学園紛争の激しかった時代に岐阜大学の学長をされたこともあり、汎人類学的立場からの教育論を書いている（「教育とはなにか」今西錦司全集（講談社）第9巻443～452頁、1969）。教育論には、アリストテレス、プラトン以来、ロック、ルソーまたラッセルなどによる著名なものも少なくないが、私は今西さんの考えに最も共感をおぼえる。

今西さんは、教育は人類が出現したと同時に存在したといえる、なぜならば人間は個体維持が生まれながらにしてできるような遺伝子のしくみが無いからである・という。コオロギは教えなくても鳴くが、人間の子供は教えないとしゃべれない、つまり人類は教育がない限り、その生存を全うし、人類という種族を維持してゆけないのである。したがって、教育とはもともと生きる道を教え教えられることであった。そして、「教育とは教える側にも教える意欲があり、教えられる側にも教えられる意欲があつて初めて成立する交互作用的な営みであった。」という。「ところが、今日の学校教育、特に高等学校や大学の教育では、教える意欲のない先生から、教えられる意欲のない学生が、教えを受けているという矛盾が、いたるところで露呈しているかのように見受けられる。」と、実りの少ない議論に終始した学園紛争時代の教育を嘆いている。

私はこの『教育は交互作用的な営みである』という考えは、教育の本質をついたものであり、現代の大学教育においても変わることはないものであると思う。教えられる意欲のない者に、いくら教えても教育は成り立たないからである。もちろん、その逆もまた真である。

一般に、医学部に入ってくる学生の勉強は多くの場合、受け身であったであろう。与えられるものを効率的に、いかに素早く、いかに多く吸収するかが試験の合否を左右する大きな要素である以上、それは当然かもしれない。しかし、大学は自ら積極的に学ぶところであり、Spoon-feeding的な教育をするところではない。大学は積極的に学ぶことを学ぶところであり、また時間がかかっても、少しくらい回り道をして、自ら考え、自ら行動し、自ら問題解決を図る方法を身につけるところである。そしてこれは、将来へ向けての基礎、基本をしっかりと身に付けることになるのである。

医学の発展と人類の福祉に貢献できるよう、高い志と夢を持ち、教えることに生き甲斐を見いだす教員と、学ぶ意欲の横溢した学生との交互作用的営みである教育が行われている所が、奈良県立医科大学であると胸を張っていえるようにしたいものである。



ホ オ ジ ロ

【ホオジロ通信のいわれ】

ホオジロの鳴き声は「イッピツケイジョウツカマツリソウロウ（一筆啓上仕り候）」と聞こえるといわれます。本学教職員および関係者の皆様に一筆啓上仕るという意味で、この欄をホオジロ通信と名付けました。

訂正とおわび

第4号で掲載しました（2頁12行「卒業式学長式辞」）
滝川孝辰様の名前は、滝川幸辰（ゆきとき）様でした。

物質の解明と設計

物理学 教授 伊藤 善将

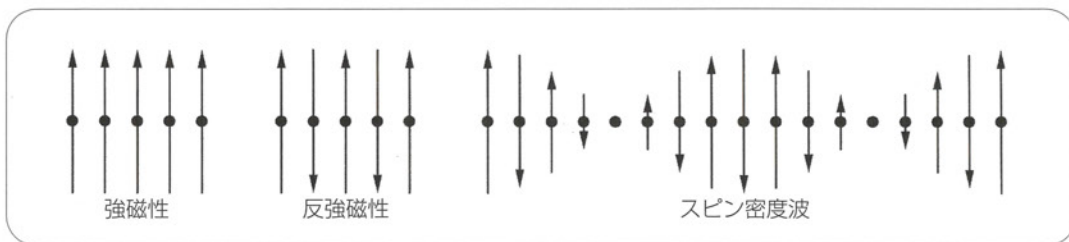
我々のまわり（地上）には、様々な物質が存在する。これらの物質の性質を物理学の立場から解明する最終的なよりどころは量子力学と統計力学といえる。量子力学は万物理論と名づけられたりし、基底状態の知識を与える。種々の熱的性質は統計力学から得られる。これらの方法を現実の問題に適用する場合、困難に遭遇するため、いろいろな手法が開発される。1) 困難はあるが、上記の原則を用いて種々の性質を解明しようとする立場（第一原理計算）、2) 現実によく対応する、見通しのよいモデルを設定し、上記の理論を適用する立場、3) 方法自体の開発、4) 数学構造に立脚した種々の手法の利用など、である。物理学教室ではこれら4つの方向の手段を用いて研究を進めている。

1. 金属多層膜の電子状態と磁性

この研究課題では電子状態の第一原理計算に基づく物質設計を行い、有用な機能を持つ新物質を創生することを究極の目的としている。具体的には、物質の磁気的性質(磁性)に関する物質設計を目指しており、現在は、金属多層膜の磁性の研究に精力を注いでいる。第一原理という言葉は計算に任意性が含まれていない。すなわち、経験的なパラメータを使用せず、物質の性質を白紙の状態から予測するという思想に基づいている。

まず、金属の磁性について簡単に説明しよう。周期表の中央部にあるクロム(Cr)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、コバルト(Co)、ニッケル(Ni)は3d遷移金属と呼ばれ、様々な磁性を示す。この磁性の起源は各原子に形成される電子の磁気モーメントである。Fe、Co、Niは永久磁石になる物質で、各原子位置の磁気モーメントが同じ向きにそろっており、強磁性と呼ばれる。これに対して、磁気モーメントが隣どうして逆の向きにそろうのは反強磁性と呼ばれ、Mnがそれに当たる。一方、Crでは、磁気モーメントの向きだけでなく、磁気モーメントの大きさも変化し、これはスピン密度波と呼ばれる(図参照)。このCrのスピン密度波を第一原理計算に基づいて説明したことは我々の研究成果の一つであり、これを含めて、第一原理計算は3d遷移金属の磁性の多様性を説明することに成功している。

ここまでは、自然界に由来から存在する物質についての議論であった。現在、ナノテクノロジーの発展により、様々な物質を層状に積層させて人工的に物質を作成することが可能になっており、3d遷移金属も例外ではない。これらの金属多層膜では新たな磁性現象の出現も期待され、さらには、その応用に関心が注がれている。実際、10年程前に、FeとCrの多層膜で見出された巨大磁気抵抗と呼ばれる現象は、磁性材料(磁気ヘッド)に革新をもたらし、その結果として、ハードディスクの容量が飛躍的に増大したことは記憶に新しい。現在の我々の研究は金属多層膜の磁性を第一原理計算に基づいて説明し、新たな磁性現象の可能性を模索するものであり、ナノサイエンスを理論的な側面から支えることを意図している。



2. 格子場の理論における対称性と Galois 群、くりこみ群

対称という言葉には、つりあいがとれている、というような意味があるが、対称性の議論では、部分の全体への配置、相互配置などを考える。本格的な最初の対称性の利用例に、19世紀に解決された代数方程式の解法問題（Galois 理論）があり、その要素は、中学数学で習う二次方程式の解の公式に見て取れる。物理学でも、対称性は広く利用され、それだけで結果を決定する強力な道具となる場合もある。本研究では、格子配置を持つ系を考える。これまで同様、点群/空間群対称性が道具となるが、指摘したのは、これらの背後にある redundant な自由度の存在である。この自由度は、格子の passive な対称操作と active な対称操作の等価性を保証するために必要となり、これを認めると被覆空間の Galois 群と点群/空間群の対応を経て、格子系の相関関数の形が決まってしまう； $\infty \div \infty$ の不定形から有限量を導く計算があるが、同じ事を対称性について行い、ポイントは、 ∞ 自由度をうまく相殺させるために強い制限が付き、結局それだけで結果が決まってしまう、ということである。二次元可解格子模型の厳密計算が出発点となったのだが、議論はその枠を超えて広く成り立ち、くりこみ群、三次元系への適用が進行中である。

3. 格子気体の秩序配列、高温超伝導の発現機構の研究 [2)、3) の研究手法を使用]

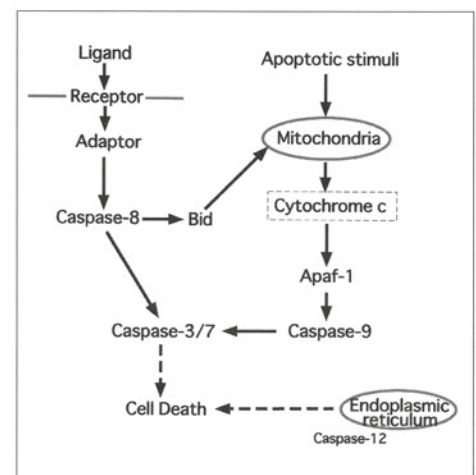
Apaf-1による脳のアポトーシス制御

生化学講座 学内講師 廣中(板谷)安佐子

アポトーシスとは個体の発生や恒常性の維持に必要な機能で、核の凝縮や断片化、アポトーシス小体の形成による細胞の断片化を伴う細胞死であることが知られています。アポトーシスの異常な亢進や低下が様々な疾患をひきおこすこともわかってきました。アポトーシスの実行過程においては特異的なプロテアーゼであるcaspaseが活性化されますが、その主要なシグナル伝達系の一つであるミトコンドリアを介した経路ではまずApaf-1がdATP、チトクロームc依存的にpro-caspase-9と複合体を形成し、その結果活性化されたcaspase-9がさらにその下流にある pro-caspase-3を活性化します。Apaf-1はヒトHela細胞質分画よりWangらによって同定されましたが、同じ頃生化学教室でもウシ胸腺抽出液より同様にdATP、チトクロームc依存的なcaspase-3活性化機構に関与する因子の精製を進めていました。その後Apaf-1を始めprocaspase-3、9の部分精製標品を得ることができましたので、これらを用いてin vitro再構成assay系を作成しいろいろな組織抽出液中の各因子の量を定量的に調べました。

Apaf-1は線虫から哺乳動物まで種を超えて保存されており、ほとんどの組織や細胞で発現していることが報告されています。特に胎生期の脳で強く発現しており、そのノックアウトマウスは脳の神経細胞が過剰に蓄積することによる頭部の形態異常のためほとんどが周産期前後に死んでしまいます。このため脳では発生過程においてApaf-1が関与する神経細胞のアポトーシスが非常に重要であるという事実は大変に印象的でした。ところが、ウシ、ブタ、マウス、ラットの各組織抽出液を調べてみるといずれも脳では特異的にApaf-1が欠損していることがわかりました。ラットの脳で詳しく調べてみると胎仔および出生直後はApaf-1の発現はやはり他の組織に比べてかなり高いのですがその後すぐに減少し生後2週間目以降は激減していました。成熟した脳の神経細胞はほとんど増加することがないためアポトーシス機構の必要性が低下し、Apaf-1レベルも低下したと思われる。また、アポトーシスがおこりにくくなっているほうが外からの刺激から脳をプロテクトしやすいというメリットもあります。事実ラット胎仔大脳の神経細胞を初代培養するとやはり1週間目くらいからApaf-1は減少し、それに伴ってアポトーシス刺激に対する感受性も低下していました。しかし、adultラットでも脳に損傷を与えるとApaf-1の発現誘導と共にcaspase-3や9の活性化がみられ、ミトコンドリアを介したアポトーシス系が必要に応じて復活し得ることもわかりました。現在Apaf-1の発現誘導に関する因子としてp53とE2Fが報告されており、特にp53はDNA損傷によるアポトーシスを誘導することからその標的遺伝子の1つがApaf-1であるのは大変興味深いところです。

脳では損傷以外にも血管性疾患や神経変性疾患でいくつかのcaspaseの活性化が報告されていますが、いずれもそのレベルは他の組織の場合と比べてかなり低く、分子機構もまだ十分に解明されていません。特に神経変性疾患における細胞死は長い年月をかけてゆっくり進むものが多く、実行分子が高発現する必要がないためにわかりにくくなっているのかもしれませんが。現在では、多くの疾患で共通してみられる異常タンパク質の形成と細胞内蓄積による“gain of toxic function”が神経変性の原因であるという考え方が定着しつつあります。一方で興奮性アミノ酸毒性によるカルシウムの過負荷、ATP代謝異常、酸化ストレスによるROS産生などミトコンドリアが関与していると思われる神経細胞死の報告も多数あります。例えば、ミトコンドリアの呼吸鎖阻害剤を動物に投与するとパーキンソン病やハンチントン病に近似した病理像を示す脳の神経変性モデルが作成されます。この時Apaf-1のドミナントネガティブ体を前投与しておくことで神経変性がブロックされるという報告があり、疾患によっては最終的な細胞死の実行過程ではApaf-1を含めてミトコンドリアの系によるアポトーシスが関与している可能性もあります。これらの他にも小胞体ストレスやcaspaseの活性化を伴わない細胞死など神経変性疾患の発症メカニズムについては新しい報告が多数ありますが、最終的な実行過程についてはまだまだ不明な点が多く残されています。



Apoptotic pathway

皮膚科学講座 教授 宮川 幸子

皮膚科学教室は昭和38年11月1日、皮膚泌尿器科学講座から分離独立し、初代教授に坂本邦樹先生が着任された時からはじまる。開講当初は3名のスタッフでスタートしたが、2代目教授白井利彦先生を経て、現在、3代目宮川幸子教授のもと、教員9名、非常勤医師1名、医員6名、大学院生5名、研修医3名の総勢24名の陣容で日常診療、教育、研究にあたっている。研究については、特に膠原病、天疱瘡などの自己免疫性皮膚疾患が、宮川教授を中心とした長年の教室の研究テーマであり、診断・治療を念頭においた臨床研究を進めており、この方面で全国的に名が知られている。その他、浅田秀夫助教授を中心にリンパ腫を含めたウイルス性皮膚疾患、アトピー性皮膚炎、山科幸夫非常勤講師を中心にサーモグラフィーを用いた皮膚疾患の診断、新関寛徳学内講師を中心に免疫アレルギー、掌蹠膿疱症などについて臨床への還元を念頭においた研究の充実を図っている。また、小林信彦講師を中心にラジオアイソトープ実験施設 森 俊雄助教授と共同で、皮膚癌をはじめとする紫外線皮膚障害の研究を精力的に行っている。さらに、波床光男講師をチーフとする形成外科診療班は、日本形成外科学会専門医研修認定施設として、学生教育、形成外科専門医の育成とともに、奈良県における形成外科医療の中核を担う一方で、再生医療に関する基礎研究にも活発に取り組んでいる。

1) 膠原病および自己免疫性水疱症の遺伝的背景

膠原病患者における抗SS-A抗体産生や天疱瘡における抗表皮細胞間抗体産生には遺伝的背景が存在することを明らかにした。現在、さらに候補領域を排他的に狭小化するプロジェクトが進行中である。

2) 掌蹠膿疱症の診断と病態

掌蹠膿疱症の病因として慢性扁桃病巣感染や金属アレルギーが知られているが、個々の症例での病因同定は容易ではない。そこで従来扁桃との関連を診断するために用いられていた扁桃刺激試験に改良を加え、扁桃刺激前後のサーモグラムによる皮膚温変化の測定により以前よりも感度の高い検査法を開発した。今後はこの方法を用いた病因診断に基づいた治療プロトコル作成や、病因ごとの病態や遺伝的背景の差異を検討していく予定である。

3) EBウイルス感染NK/T細胞リンパ腫と蚊刺過敏症

EBウイルス感染NK/T細胞リンパ腫では、蚊刺に対して激しい局所反応と発熱・リンパ節腫脹・肝脾腫などの全身症状がしばしばみられるが、我々はその発症にEBウイルスの再活性化が重要な役割を担っていることを明らかにしてきた。現在さらに、蚊刺刺激がNK/T細胞の悪性化におよぼす影響について研究を進めている。

4) 悪性黒色腫の転移に関わる分子の同定とその応用

我々は高転移型悪性黒色腫において、細胞間のgap junctionを形成するconnexin 26の発現が著明に増強していることをみだした。現在、腫瘍転移におけるこの分子の役割の解明を進めており、悪性黒色腫の診断および治療への応用を目指している。

5) 紫外線DNA損傷とその修復機構の解析

ラジオアイソトープ実験施設の森助教授の樹立した特異抗体を用いて紫外線DNA損傷を検出する高感度な方法を開発し、研究に使用してきた。ELISA法や免疫蛍光染色法によって紫外線DNA損傷の誘発および修復過程を定量化・可視化することにより、色素性乾皮症・トリコチオディストロフィーなどの紫外線高感受性疾患のDNA修復欠損について解析し、また、メラニン色素やサンスクリーン剤の紫外線防御効果の検討なども行ってきた。近年では特に、核内の微小領域に紫外線を照射する方法を開発し、DNA修復や細胞死のメカニズムについてさらに詳細に解析している。この他、DNA修復を促進させる因子の発見など、海外の研究者との共同研究も行っている。

6) 神経及び骨格筋の再生過程と細胞接着分子の役割

末梢神経損傷及び再建後、神経と骨格筋における細胞接着分子とその関連蛋白質の役割を解明すべく、これらの蛋白質の動向と局在について検索している。

7) 下肢虚血再還流による臓器障害

下肢の虚血後再還流時、下肢および内臓臓器の細胞が引き起こす反応を、分子生物学的に検索し、臓器障害のメカニズムと治療法につき検討している。

8) ES細胞を用いた毛髪組織の再生

ES細胞を用いた毛髪の創造と、ES細胞から放出される毛髪再生因子となる物質の探索を行っている。

9) ケロイド、肥厚性癬痕の形成過程における、p53ファミリーの役割

ケロイドや肥厚性癬痕の発症原因を解明する目的で、これらの組織における様々なp53関連蛋白質の動向を比較、検索している。

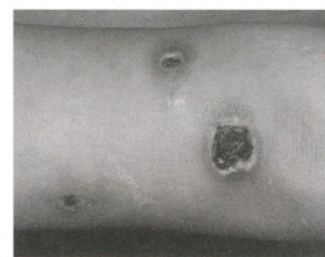


図1、EBウイルス感染NK細胞増多症患者にみられた蚊刺部の壊死

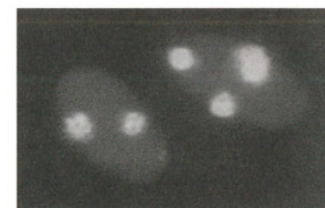


図2、紫外線により核内微小領域に誘発されたDNA損傷

大学院医学研究科再編整備に向けて

大学院医学研究科の再編整備については、平成11年12月15日大学院制度検討部会が設置され検討を重ねてきました。平成13年3月21日教授会において、大学院改革理念、大学院医学研究科専攻組織再編の趣旨が承認されています。

現在、平成16年4月再編に向けて、文部科学省への届出準備、学則改正、その他関係規程の見直し等細部の検討を行っています。

◎基本方針の抜粋

【再編の趣旨】

21世紀をむかえ、変貌する社会システムと大学が新しい時代のニーズに対応していくために全国で大学改革、大学院改革が進められてきている。

医学の分野においても、全国的に医学部教育改革が進行しており（本学医学部においても平成12年度から新カリキュラムへ移行を開始している）、国立大学の大学院重点化をはじめ、公私立大学大学院研究科も再編整備等を行ってきている。

本学大学院医学研究科は昭和35年に設置され、開設以来40年以上を経過しているが、開設当初の制度で組織構成されている。今日の急速な医療技術の進歩と医学研究の高度化、研究領域の拡大、並びに地域・社会の医療ニーズに対応するため、大学院医学研究科の再編整備をするものである。

本学大学院医学研究科再編の目的は、種々の問題を迅速に解決する能力と未知の課題に柔軟に対処しうる創造力を兼ね備え、良質の医療知識や最高の医療技術を身につけた優秀な医療リーダー及び研究指導者を養成するところにある。また、この大学院再編整備は、まさに本学そのものの教育、研究、診療の活性化にも繋がるものである。

【再編の内容】

学部の講座制を基盤とした生理系、病理系、社会医学系、内科系、外科系といった基礎医学と臨床医学を区分していた従来の専門課程を、多角的、学際的な研究が展開でき、現在及び将来において高いニーズをもつ研究内容に即した専攻に再編する。

◎16年度大学院医学研究科学生募集について

上記のとおり、16年4月に再編する方針で検討しているため、例年とは異なった募集形態、募集時期になります。関係者の方にはご迷惑をおかけしますが、出願希望者等にご注意いただくようご指導方よろしくお願ひします。

(学 生 課)

管財課技術職員表彰

○優良ボイラー技士表彰（社団法人日本ボイラ協会会長表彰）

副主幹兼エネルギーセンター ボイラー係長 松尾 博

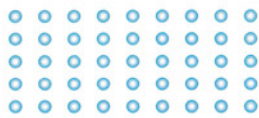
平成14年11月7日、東京都「九段会館」において開催された「第40回全日本ボイラー大会」で表彰された。

○電気保安功労者表彰（奈良県電気協会会長表彰）

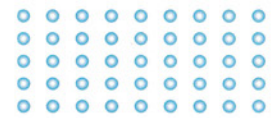
エネルギーセンター 電気係長 丹波 啓之

平成15年3月25日、奈良市「ならまちセンター」において開催された「平成15年電気記念日行事」で表彰された。

(管 財 課)



平成15年度 科学研究費補助金の内定状況



●平成15年度の文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金の内定状況は次のとおりです。(学 生 課)

内定件数 72件 内定金額 17,680万円
(77件) (14,854万円) ()内は平成14年度

研究種目	所 属	職	氏 名	研 究 課 題	研究期間
特定領域研究(2)	生物学	教授	大西 武雄	分子シャペロンを併用した放射線・温熱癌治療法の基礎的研究	12~16
	解剖学第二	教授	和中 明生	前脳基底部コリン作動性神経的特異的ノックアウトマウスにおける学習記憶情報	15
	内科学第一	教授	斎藤 能彦	遺伝子変異動物を用いたナトリウム利尿ペプチド系の虚血再灌流傷害における意義の解明	12~16
基盤研究(B)(1)	耳鼻咽喉科学	教授	細井 裕司	最重度難聴者用補聴システム開発のための超音波聴覚の応用研究	15~17
基盤研究(B)(2)	化学	教授	大崎 茂芳	新素材としての蜘蛛の糸が紫外線で力学的に強化される機構の研究	15~16
	解剖学第二	教授	和中 明生	口蓋形成の分子基盤	14~15
	生理学第二	教授	高木 都	病態モデル動物における結腸自動運動およびペースメーカー機構の解明	14~15
	寄生虫学	助教授	吉川 正英	マウス胚性幹細胞の肝細胞への効率的分化誘導—細胞移植治療にむけて—	14~16
	法医学	講師	石谷 昭子	SNPs等遺伝子多型解析による死因不明の突然死に関わる遺伝子の検索	14~15
	腫瘍病理学	教授	國安 弘基	癌細胞由来サイトカインによる癌の宿主免疫系からの逸脱機構に関する研究	15~16
	外科学第一	教授	中島 祥介	皮下における肝臓器新生の試み	15~17
	外科学第二	教授	榊 寿右	硬膜動静脈瘻モデルにおける血管新生関連因子発現と遺伝子治療	14~16
	小児科学	講師	杉本 充彦	生理的血流下での血栓形成メカニズムの解明	15~17
	口腔外科学	教授	桐田 忠昭	口腔癌における放射線・化学・温熱療法施行後のアポトーシス関連遺伝子発現応答	15~17
基盤研究(C)(1)	公衆衛生学	助手	御輿 久美子	アカデミック・ハラスメントの実態調査研究	14~16
基盤研究(C)(2)	保健体育	講師	石指 宏通	運動時の血栓症予防に関する研究	15~16
	解剖学第一	講師	秦野 修	副腎皮質と生殖腺の共通原基の分化と組織形成の分子機構	15~17
	解剖学第二	講師	芳賀 敏実	骨肉腫、その他の固形癌の血清診断KITの開発	14~16
	生理学第一	講師	豊田 ふみよ	両生類におけるフェロモン受容メカニズムに関する研究	14~15
	生理学第二	助手	門脇 真	食物アレルギーと腸管免疫性疾患:特に腸管求心性知覚神経の役割について	14~16
	病理診断学	講師	吉川 隆章	骨髄間葉系幹細胞による骨および皮膚の再生治療研究	15~17
	病理病態学	講師	中村 光利	脳神経腫瘍における再発・悪性転化の原因遺伝子群に関する研究	15~16
	内科学第一	講師	岩野 正之	腎間質線維化の進展におけるHIF-1を中心とした低酸素応答の関与	15~16
	内科学第二	教授	木村 弘	睡眠時無呼吸症候群における低酸素・再灌流ストレスと動脈硬化促進因子に関する研究	15~16
	内科学第三	助手	吉治 仁志	血管新生制御による肝癌抑制の機序および治療応用への基礎的検討	14~15
	内科学第三	教授	福井 博	重症肝障害における多臓器不全発現と生体内各種マクロファージ機能	15~17
	神経内科学	教授	上野 聡	アルツハイマー病の神経細胞死を抑制するヒューマニンの機能と関連遺伝子の解析	14~15
	外科学第一	助教授	久永 倫聖	1型糖尿病に対するパイオ人工膵移植の研究—拒絶制御から再発防壁へ—	14~15
	外科学第一	助手	高 済峯	進行肝細胞癌治療を目的としたドナー骨髄造血幹細胞ミニ移植併用生体部分肝移植	15~17
	外科学第一	助教授	金廣 裕道	小腸移植における拒絶反応メカニズムの解明と血管新生を標的とした新たな治療法の開発	15~16
	外科学第二	助教授	川口 正一郎	内頸動脈閉塞性病変に起因する虚血性網膜症の予防と対策	15~16
	外科学第三	助手	長阪 重雄	無細胞化処理凍結保存心臓弁の移植後弁葉細胞再生に関する研究	14~15
整形外科	教授	高倉 義典	再生医療技術を応用した人工関節の固着性に関する実験的研究	14~17	
整形外科	助教授	矢島 弘嗣	血管柄付骨膜と自家培養人工骨を用いたハイブリッド骨の作製	13~15	

研究種目	所属	職	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究(C)(2)	整形外科	講師	森下 亨	ラット骨軟部腫瘍における酸素分圧の不均一性と腫瘍細胞への影響	15~16
	整形外科	講師	富田 恭治	骨髄間葉系幹細胞を用いた血管柄付きハイブリッド人工骨の開発	15~17
	小児科学	助教授	嶋 緑倫	血友病A遺伝子治療における凝固動態および活性化機構に関する基礎的研究	14~16
	小児科学	講師	田中 一郎	インヒビター保有血友病における抗イディオタイプ抗体誘導機序に関する研究	15~16
	精神医学	助教授	中村 祐	N2a細胞における酸化的ストレスによるDNA損傷修復蛋白DDBIの動態の解析	15~16
	皮膚科学	教授	宮川 幸子	紫外線感受性トリコチオディストロフィー細胞を用いたTFⅡHのDNA修復機序の解析	14~15
	皮膚科学	講師	波床 光男	神経損傷時の骨格筋の再生過程における細胞接着分子の変化と機能に関する研究	14~15
	泌尿器科学	助教授	植村 天受	ヒト腎細胞癌のMN/CA9発現における、低酸素状態、低メチル化、VHL異常の役割	14~15
	泌尿器科学	助手	田中 基幹	前立腺癌に対する、PTEN癌抑制遺伝子による治療応用の可能性	15~16
	耳鼻咽喉科学	助教授	家根 旦有	甲状腺未分化癌の分子シャペロンを用いた化学療法への応用	14~15
	麻酔科学	講師	川口 昌彦	脊髄虚血後の細胞死の機序及び治療法の検討	13~16
	麻酔科学	助手	坂本 尚典	脊髄虚血に対する保護物質としてのデルタオピオイドの基礎的研究	15~18
	総合医療・病態検査学	教授	中村 忍	超音波を利用した悪性腫瘍治療法の開発に関する基礎的研究	15~16
	口腔外科学	講師	山本 一彦	シクロオキシゲナーゼ2インヒビターによる口腔癌の治療に関する実験的研究	14~15
	口腔外科学	講師	川上 哲司	種々のストレスによる顎関節滑膜細胞の応答	15~16
	口腔外科学	助手	川上 正良	顔面骨格パターンを形成を制御する分子メカニズムの解明	15~16
	救急医学	助教授	村尾 佳則	出血性ショックにおけるアポトーシス発現と臓器障害出現のメカニズムに関する研究	14~15
	腫瘍放射線医学	講師	岩田 和朗	TL-シートによる治療用密封小線源近傍の線量分布測定法の研究	14~15
	輸血部	教授	藤村 吉博	多彩表現型血栓症を示すVWF特異的切断酵素の活性低下の病態解析	15~17
	周産期医療センター	教授	高橋 幸博	新生児の止血機構と血栓症発症の病態解明並びに治療法の開発	14~15
萌芽研究	生物学	教授	大西 武雄	癌抑制遺伝子p53産物のC末端ペプチドによる放射線・温熱治療増感	15~16
	生物学	講師	高橋 昭久	重粒子線特異的誘導新規p53非依存性アポトーシス関連遺伝子の探索	14~15
	生理学第二	教授	高木 都	胚性幹(ES)細胞から長く伸びる腸管をつくる	14~15
	生化学	助教授	田中 康春	p73/ΔNp73を介した慢性関節リウマチ滑膜細胞増殖の制御	15~16
	細菌学	教授	喜多 英二	病原体の上皮細胞接着に対する初期応答が感染感受性を規定する	15~17
	外科学第一	教授	中島 祥介	マウスES細胞から分化誘導した膵島細胞のアロ免疫原性に関する研究	15~16
若手研究(B)	生理学第一	助手	杉岡 美保	チロシキナーゼ型成長因子受容体による網膜神経節細胞の分化制御機構	14~15
	生理学第二	助手	竹中 千香子	ES細胞由来心筋細胞移植により心筋梗塞は治るか?	14~15
	生化学	講師	亀岡 正典	HIV-1複製機構におけるポリADP-リボース合成酵素の役割についての解析	14~16
	病理病態学	助手	島田 啓司	前立腺癌におけるリン酸化FADDを介した新規アポトーシスマカニズムに関する研究	14~15
	寄生虫学	助手	王寺 幸輝	胚性幹細胞(ES細胞)から有毛細胞の作製	14~15
	公衆衛生学	講師	斉藤 功	地域での高感度CRPとヘリカルCTによる冠動脈石灰化に関する疫学的研究	15~16
	神経内科学	助手	平野 牧人	遺伝性小脳失調原因遺伝子アプラタキシンの野生型及びスプライス変異型蛋白の機能解析	15~16
	外科学第一	助手	長尾 美津男	胆管細胞癌に対する新規治療戦略の開発(肝内転移およびリンパ節転移の機序解明)	14~15
	外科学第一	助手	池田 直也	ヒト膵癌における特異抗原同定から抗体療法への展望(膵癌特異抗体の作製)	14~15
	外科学第一	助手	小山 文一	Bcl-XL遺伝子導入による放射線性膵炎発症予防効果	14~15
	精神医学	助手	根来 秀樹	奈良県橿原市の不登校生徒にみられる「引きこもり」症例の臨床的研究	14~16
	口腔外科学	助手	今井 裕一郎	高悪性度口腔癌に対する化学シャペロン治療の応用に関する基礎的研究	15~16

看護短期大学部より

今、看護学教育に求められていること

看護短期大学部 学科長 今井 充子(老年看護学教授)



近年の医療の高度化、患者の高齢化・重症化に伴い看護業務は急速に複雑・多様化しています。人命と向き合う看護師に求められる責務の重さは言うまでもありませんが、加えて、最近では患者や家族の人権への倫理的対処の不適切や患者との信頼関係の欠如による問題が少なくありません。医療現場で起こる医療過誤問題でも看護師のミスによるものがあり、医療従事者の一人として胸の痛む想いでいっぱいです。

看護学生の大半は、青年期の真っ直中にあり将来の夢を持ちながら頑張っていますが、不安に苦悩する患者との人間関係をどうつくりあげたらよいか、未熟さと不安で困惑し、模索しています。こうした学生の成長過程を見ながら、それを支援し、職業教育という制約の中で教育環境を整えるための取り組みをして30年余りになりました。

ここで、社会から求められる看護師の育成について、日頃の所信を述べてみたいと思います。看護学の教育にあたって、人の生命に関わる看護師に求められる基本的条件として大切なことは、次の3点であると考えています。

- ① 社会人としての人間性（人間関係を形成できる能力、関係者との協働と協調性）
- ② 看護職として求められる人間性（愛・見る・護る・道徳・倫理・守秘義務 等）
- ③ 看護職として責任を果たすための科学性（専門知識、問題解決能力、看護実践に活かす基礎看護技術、研究的態度と実践能力）等。

看護教育者の使命は、看護学生の学習を支援することですが、忘れてならないことは専門職としての学習前提として、良識ある一般社会人としての人間性の育成が不可欠です。看護師は、自らの自己中心性を乗り越え、人と協調しながら人間観、老年観、死生観そして創造的・着実的・洞察力を持った看護観を持ち、人間として成熟することが必要です。今年の3月、厚生労働省から「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書が示され、看護基礎教育における技術教育の現状と課題、臨地実習における看護技術の基本的な考え方、身体的侵襲を伴う看護技術の実習指導のあり方、臨地実習における患者の同意を得た実習環境の整備等について報告されました。その中で、卒業直後において、看護師としての技術能力と看護の現場から期待される能力との乖離が大きく、看護実践能力の低下は安全な看護や医療提供にも影響が懸念されること、国民の権利意識や安全な医療への関心が高まる中、学生の実習環境においても患者や家族への説明と同意を得ることが望ましいことが示唆されました。患者の人権、学生の人権を配慮する規制の枠内で、医療の安全確保を求めています。看護学臨地実習においても、患者や家族が納得できるような説明のもとでコンセンサスを得ておくことが必要です。

看護は実践の科学と云われるように、看護学教育は理論の上に実践が伴って初めて看護といえます。看護教育者は、看護学生が原理に基づく看護技術を確実に対象者に適用し応用できているか否かを、臨地実習場面でしっかり確認する必要があります。

看護は、人間のライフステージにおいて「生・老・病・死」に立ち会うことの出来る崇高な職種であるからこそ、心の温かさ、優しさ、思いやりを持ち、人間の弱さや、苦しみ、悲しみに関わり合う人間味のある看護師に育ってほしいと願っています。

来年度に開学予定で進められている医学部看護学科の準備過程で、カリキュラム構築に携わる一人として、21世紀に求められる看護学教育が花を開くように、その礎になれば幸いです。

看護部より

新規採用者研修の紹介

看護部における段階別教育の一環として、例年新規採用者オリエンテーションを実施しています。平成15年度は、看護職員88名の採用がありました。看護部の目標は「患者様が安全・安楽・安心して療養できるよう、看護の基本に立ち返り、患者様への一つ一つの関わりを大切にする」です。この目標を達成するための一助として、4月1日から4日までは例年の計画で行い、更に今年度は、4月30日と5月7日の両日に分けて研修を行いました。当世若者の気質を考慮し「コミュニケーションの取り方」をテーマに、点滴の更新場面を設定しました。方法はロールプレイングの技法を用い、演じた「事実」に着目し、特に患者の言葉の中に隠された気持ちに重点を置きました。

ねらい: 患者とのコミュニケーションの取り方を学び、看護実践に生かすことができる。

コミュニケーションを通して事故防止（確認）と看護手順について学び実践することができる。



内容：

1. ロールプレイング<点滴を更新する場面>
演技者 主任2名
2. 演技を見て考える 良かった点 改善点
3. 発表 (8グループ)
4. シナリオ作成<改善されたシナリオ>
5. 改善されたシナリオをもとにグループ毎に演技
6. グループ・ワーキング評価<演技したシナリオの評価>
7. 発表
8. まとめ

研修終了後のアンケート結果より

- 忘れがちになっていたので、患者の気持ちに目を向けていかなければと考えた。
- 業務に慣れてきた時だったので、確認を行うことの大切さを改めて実感できた。
- 一つのケアにもたくさんの配慮と看護的な視点が必要だとわかったため、奥行きが出ると思う。などがあり、有意義で充実した研修であったという意見が多くありました。

医師国家試験合格状況

本学の状況

	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)
15年3月卒業	91	88	96.7
既卒	14	6	42.9
計	105	94	89.5

平均合格率

	国立	公立	私立
全国	91.4	94	88.4

看護師・助産師国家試験合格状況

本学の状況

(平成15年3月卒業)

	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)
看護師	72	71	98.6
助産師	15	12	80.0

平均合格率

	全国	大学	短大	専門学校
看護師	96.1	98.4	97.4	96.7
助産師	91.1	83.7	91.5	94.2

いよいよ7月から包括支払方式を実施!!

昨年の社会保険診療報酬等の改定により、特定機能病院における入院医療に係る医療機関別包括評価の導入を平成15年7月より実施することとなりました。

現在、特定機能病院である当病院の診療料金算定は、疾患の診断や治療に対して一つ一つの行為や方法等保険で認められている全てに対して診療費が支払われる〔出来高払方式〕を採用しておりますが、これを改め実際にかかった額にかかわらず、一定の診断名や状態に対してのひとまとまりの医療行為に対し一定の医療費が支払われる〔包括支払方式〕を採用します。

対象患者は、一般病棟の入院患者であって、傷病名等が診断群分類（1,860分類）に該当される方となります。

診療報酬の額の算定方法は、次の2点の合計額となります。

診断群分類による包括評価

診断群分類毎の1日当たり点数×医療機関別係数×入院日数×10円

出来高評価

入院基本料等加算（入院時医学管理加算等を除く）、指導管理、リハビリテーション、精神科専門療法、手術、麻酔、放射線治療、心臓カテーテルによる諸検査、内視鏡検査、診断穿刺・検体採取、処置（1000点以上のもの）について、出来高で算定した額

厚生労働省としては、包括支払方式の導入により、増大する医療費の縮減や医療機関毎の医療費の格差の縮小、また、診断群毎の診療が標準化されるとともに、質のばらつきを少なくすることを通じてコストの削減・効率化等医療コスト管理の向上を図ることを目指しています。

なお、今年も7月から10月までの退院患者を対象とした調査が実施されることとなりました。この調査に基づき来年度以降の診断群分類を見直すこととなります。診断群分類毎の1日当たり単価、医療機関別係数等見直されることになり、来年度以降の診療収入に大きな影響を及ぼすこととなります。

今後更に医療の安全と質の向上、コストの縮減等が求められ、このためにはクリニカルパスの導入・整備や地域医療機関との連携等を進める必要があります。

包括評価の導入に対する理解と認識を深めていただき、調査協力をお願い致します。

(病院第一課)

病院玄関前整備工事始まる!!

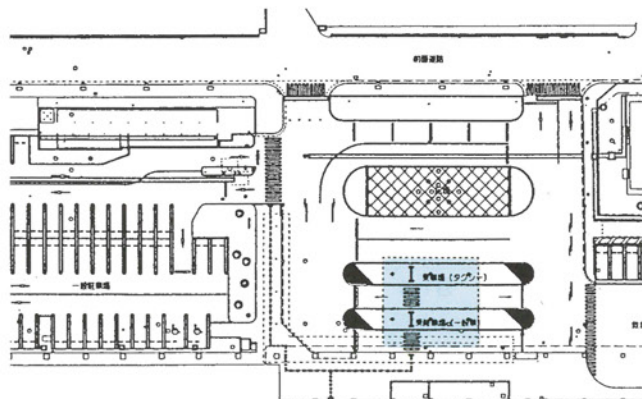
病院の顔というべき玄関も、築山を中心にかつてはきれいだったはずが、現在では患者さんや患者さんの送迎用の車や客待ちタクシー等で混雑し、不便をおかけしているところです。そこで、病院利用者の快適性、利便性、安全性の確保を目的として整備工事を行うことになりました。

既存の築山を撤去し、次のような整備を行うことにより玄関前にふさわしくなるものと思います。

- ①車両の走行レーンについて、降車、一般車乗車、タクシー乗車、通過車の各通行レーンを区別し、円滑に流れるように設定
- ②車走行部分と歩行者の分離を図るため、適切な歩道の配置及び乗降場所を2カ所増設し安全地帯を設置
- ③屋根（庇）の架かった乗降場所の確保（青色部分）
- ④病院入口までの通路をバリアフリー化
- ⑤タクシーの乗車場所を移設変更
- ⑥身障者用駐車場スペースを入口側付近に設置するなど駐車場ラインの引き直し
- ⑦駐輪場上屋の移設
- ⑧景観保持のための広場を設けプランターを設置、なお、広場は災害避難時の避難場所としても有効利用

工事の期間は7月上旬から9月末日までの予定です。工事中はいろいろとご迷惑をおかけしますが、特に病院利用者が戸惑われることのないように皆様のご協力をお願いします。

(管財課)



完成予定図

8月2日(土)にオープンキャンパスを実施します

この度、受験生に本学への関心を持ってもらうために医学科のオープンキャンパスを実施します。

実施内容は、右表のとおりです。なるべく多くの方に参加していただきたいので、お知り合いに高校生・受験生の方がおられましたら教えてあげてください。

また、主な対象は、高校生及び受験生ですが、地域に貢献する県立大学という本学の性格上、一般の方も含めどなたでも参加することができます。

なお、施設見学のみ事前に参加申込みが必要ですので、往復ハガキかEメールに住所、氏名、電話番号、年齢を書いて下記へ申し込むようお願い下さい。(先着順で100名)。

〒634-8521 橿原市四条町840
奈良県立医科大学 学生部学生課教務係
e-mail:gakuseik@narmed-u.ac.jp

実施にあたりましては、関係者の皆様のご協力をよろしくお願いします。

(学 生 課)

(スケジュール)

時 間	内 容
12:30~13:00	受 付
13:00~13:30	講演会 『医学を志す君に』学長 吉田 修
13:30~13:40	学科紹介及び入試概要説明 学生部長 吉原 紘一郎
13:40~14:20	在学生から受験生へのメッセージ 1年生、4年生、6年生
14:20~14:30	休憩
14:30~15:00	模擬ミニ講義 『再生医療の最前線』 整形外科学教授 高倉 義典
15:00~16:00	施設見学 定員100名 総合研究棟、基礎医学校舎、附属病院の見学
15:00~17:00	個別相談 入試・教務・厚生コーナー 在校生による相談コーナー

チェンマイ大学との学術交流事業レポート

チェンマイ大学医学部との学術交流事業の一つとして行われている本学学生のチェンマイ大学での研修が、イラク戦争が始まりSARS感染が大きく取り上げられていた中、平成15年3月19日から28日までの10日間実施されました。カリキュラムの関係で本来参加すべき5年生が集まらず、2年生、3年生が主体でしたので、今まで行われていた臨床の場での研修とは少し趣が異なったようですが、生化学・生理学・病理学の研究室や実習室の見学、外科・小児科・産婦人科の病棟の見学のほかに、山間部の診療所や地域保健の一つとして麻薬中毒患者の診療および住民への教育を行っている病院へも足を運び、当地ならではの医療に触れる機会も与えられたそうです。チェンマイ大学では学生の中に留学生の相手をするサークルがあり、日本からも多くの大学の学生が訪れるそうで、本学学生の滞在中、研修以外にチェンマイの寺院や名所の観光案内についても手慣れていて、頼りないこちらの英語でもとても気持ちよく過ごせたようです。

今回参加した学生は、「病院や大学、医療については日本と変わらないと思う(決して、日本の方が進歩しているわけではない!)。それよりも、同年代の(学年はタイの学生の方が上だが、大学入学前に飛び級で進級した者も多く、実年齢は同じか下であったらしい)学生との交流(医学部以外の学生も合流)がとても貴重な体験になった」と言い、「今回交流をした学生のうちの何人かが、来年本学に来るけれども、僕らが受けたような温かいもてなしができるだろうか。学生だけでなく、大学側も一緒に考えないといけないと思う」と形式だけの交流でない、中身の充実を願っての意見が多く聞かれました。

(細菌学教室 水野文子)



チェンマイ大学 産婦人科教室にて



チェンマイ大学 医学部

Report

学報発刊の大きな目的は、「本学がどの方向に動いているのか、今後どう動いていこうとしているのかを“見える”ようにすることにより、本学の教職員が本学の情報を共有し、大学人としての意識の高揚と大学の更なる発展を図る」ことです。

そのため、第2号から「教授会」報告を掲載していますが、今後、更に改革が進む本学の動きを、より早く伝えるため、「将来計画委員会」の報告を掲載することにします。

(総務課)

将来計画委員会

本学が今後、種々の改革を推進する中で、将来計画委員会の位置付けがますます重要になることから、昨年11月に将来計画委員会規程を改正（学報第3号参照）、本年2月に改正後の初委員会を開催、3月から部局長会の前に定期開催することになった。

〈3月4日開催〉

○将来計画委員会での検討課題について

2月の委員会で、次の3課題についての検討方法の整理がなされ、今後、本学の重要案件について将来計画委員会に3つのワーキンググループ（WG）を設置し検討していくことになった。

- ① 学則等規程の見直し→「学則等規程検討WG」で検討
看護学科の設置に伴い必要となる学則等の規程の改正、従前からある本学規程の見直し、部局長の見直し等について検討
- ② 教員選考関係
→「教授選考のあり方検討WG」「教員の任期制に関する委員会」で検討
教授、教員の選考のあり方や教員の任期制について検討
- ③ 附属がんセンター等の検討→「附属がんセンター等検討WG」で検討
附属がんセンターの今後の方向性や高度先端医療の中核となる研究機構について検討

○教育開発センターの設置について

平成15年度に設置を検討している本センターについて、センター規程等及びセンター教授候補者の選考基本方針（案）について協議

本学におけるセンターの位置付けやセンターの教員について任期制を導入することを検討

〈4月4日開催〉

○3ワーキンググループ（WG）の構成委員について

各WGで検討を行う内容及び将来計画委員12名とそれ以外の教授18名を加えた委員構成（各WGはそれぞれ10名の委員で構成）について確認を実施

○教員の任期制に関する検討委員会の検討状況について

他大学における教員の任期制の導入状況の調査結果を報告し、本学での任期制のあり方について協議を実施

○看護学科設置に向けての進捗状況について

本年9月に文部科学省に学科設置届出を実施することに関連した看護学科設置準備のスケジュール（案）と看護学科の各教員選考の内定状況を報告し協議を実施

〈5月9日開催〉

○看護学科設置後における教授会のあり方について

看護学科設置後の教授会運営について全体教授会のみとする案と医学科と看護学科の各教授会議を経てから全体教授会とする、いわゆる二階建て案について検討

○教員の任期制に関する検討委員会の検討状況について

教育開発センター教員への任期制の導入について、同委員会での検討状況を報告し、外部評価を加えた評価方法等について協議を実施

○WGの検討状況について

附属がんセンター等WGの委員長に榊教授が、教授選考あり方WGの委員長に福井教授が選出されたこと及び両WGの第1回検討状況について報告

〈6月6日開催〉

○教員の任期に関する規程等について

教育開発センターの教授選考に関連し、センターの教員に任期制を導入するために必要な、「教員の任期に関する規程」及び「任期を定めて任用する教員の再任手続きに関する規程」の制定について協議を実施

教 授 会

○ 教授候補者の選考状況

[5月13日決定]

病理診断学講座教授候補者

「病理のあり方検討委員会」で「病理診断学講座」の教授候補者の選考について、投票が行われた結果、野々村 昭孝氏(金沢大学 医学部附属病院 病理部 助教授)が教授候補者として決定された。

今後、病理診断学講座は、臨床において病院病理部門を管轄することになる。

正式就任は、知事の発令日(7月1日:6月10日教授会報告)となる。

○ 大学規程の改正等の状況

[5月13日承認]

教育開発センター規程の制定

3月に提案された「教育開発センター規程(案)」「教育開発センター運営に関する申合せ(案)」「教授候補者の選考に係る基本方針(案)」について承認後、規程について法規委員会に審議が付託され、本日付で承認され施行された。

今後、教員の任期制に関する検討委員会で検討されている「教員の任期制に関する規程(案)」の提案、審議とともに、教育開発センター教授や教員の選考が開始される。

【教育開発センターとは】

学内外の健康科学並びに保健医療の発展に寄与するために、その担い手である医療人の教育能力を高め、健康・医療教育学、卒前・卒後の教育カリキュラム並びに教育活動のあり方を開発することを目標とし、本年度に設置される。

[6月10日承認]

看護学科設置後の教授会の運営方法

平成16年度以降の教授会の運営方法については、医学科と看護学科の「学科教授会議」及び「全体教授会」との2段階構成とすることに承認された。

[6月10日報告]

停年退職予定の教授に係る後任選考について

今年度末で停年を迎える教授の後任の選考については、教授選考のあり方についてWGで検討中であるので、その新しい選考方法に則って行うことを報告

平成15年度本学在外研究員の決定について

本年度の本学の在学研究員(本学からの定額旅費の支給を受けて、長期の海外出張を行う教員)2名が次のとおり決定したことを報告

生理学第二講座 講師 坂田 進 腫瘍放射線医学 助手 玉本 哲郎

○ 各委員会委員の改選状況

[4月8日報告]

法規委員会委員(任期2年)(事務局長以外の委員)

薬理学講座 教授 中嶋 敏勝 衛生学講座 教授 車谷 典男 耳鼻咽喉科学講座 教授 細井 裕司
口腔外科学講座 教授 桐田 忠昭

渉外委員会委員(任期2年)

外科学第二講座 教授 榊 壽右 整形外科学講座 教授 高倉 義典

兼業審査委員会委員(任期2年)(附属病院長、事務局長以外の委員)

生物学 教授 大西 武雄 細菌学講座 教授 喜多 英二 衛生学講座 教授 車谷 典男
整形外科学講座 教授 高倉 義典 放射線医学 教授 吉川 公彦 総合医療・病態検査学講座 教授 中村 忍

大学院中央施設設置委員会委員(任期2年)(大学院中央施設長以外の委員)

生理学第一講座 教授 山下 勝幸 公衆衛生学講座 教授 米増 國雄 内科学第三講座 教授 福井 博
外科学第三講座 教授 谷口 繁樹 生物学 教授 大西 武雄 輸血部 教授 藤村 吉博
薬理学講座 講師 佐藤 広康

中央標本室委員(任期:~H16.10.22)

寄生虫学講座 教授 石坂 重昭

[6月13日報告]

ラジオアイソトープ委員会委員(任期:~H16.12.25)

腫瘍放射線医学 助教授 吉村 均

[6月10日報告]

研究用コンピュータネットワーク運営委員会委員(任期2年)

衛生学講座 教授 車谷 典男 内科学第三講座 教授 福井 博 泌尿器科学講座 教授 平尾 佳彦
中央臨床検査部 教授 岡本 康幸 統計・情報学 助教授 林田 秀宜

組換えDNA実験安全委員会委員(任期2年)

哲学 教授 豊田 剛 内科学第一講座 学内講師 岩野 正之 RI実験施設 助教授 森 俊雄
動物実験施設 助手 久保 薫

図書委員会委員(任期2年)

病理病態学講座 教授 小西 登 麻酔科学講座 教授 古家 仁 英語 助教授 吉田 泰彦

人権施策委員会委員(任期2年)(学長、部局長以外の委員)

ドイツ語 教授 本田 陽太郎 法医学講座 教授 羽竹 勝彦 口腔外科学講座 教授 桐田 忠昭

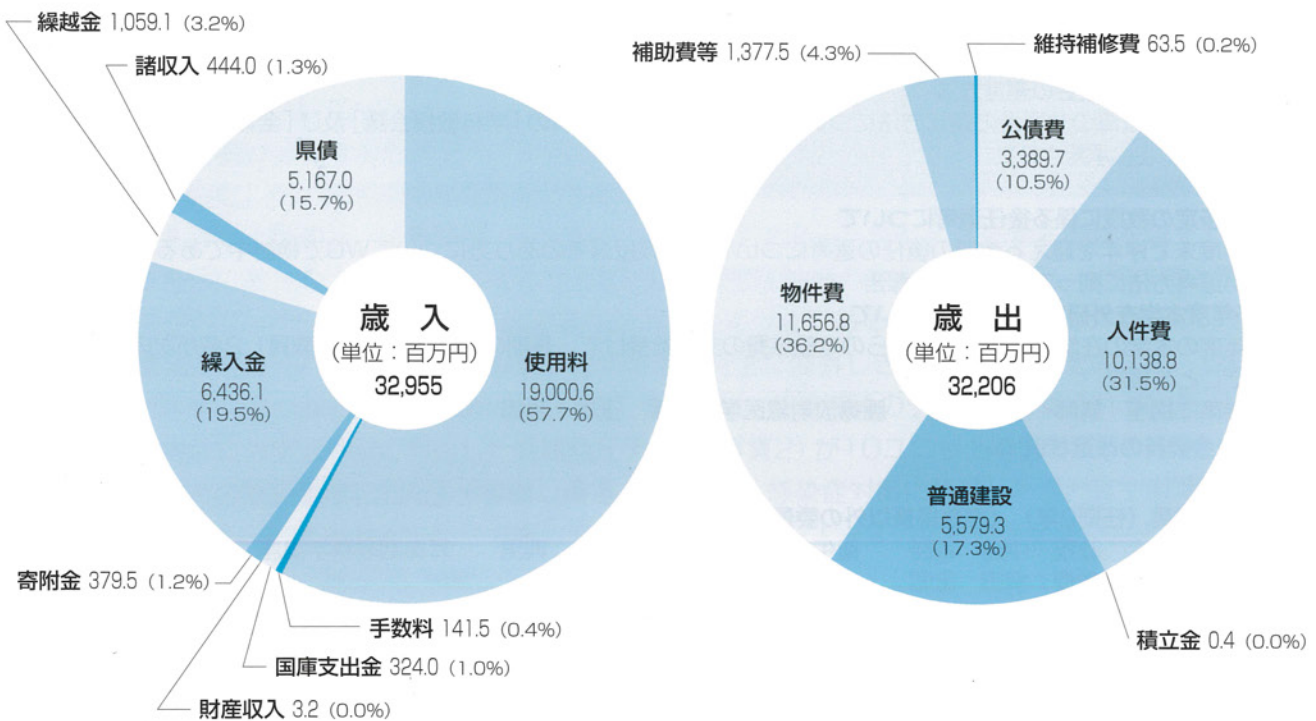
平成14年度

奈良県立医科大学費特別会計決算

平成14年度の決算は、病院使用料収入が対前年比1%増加したものの、歳出においては、医薬材料費等の支出増が、病院使用料収入の増加額を上回る決算となりました。

平成15年度にあっては、医療保険制度の改正等により病院使用料収入の確保が一層困難となることが予想されます。従前以上に積極的な病院使用料収入の確保・経費節減合理化等歳出の削減に取り組み下さるようお願いいたします。
(総務課)

▲	歳入決算額	329億55百万円	(対前年度41億29百万円、14.3%の増)
▲	歳出決算額	322億6百万円	(対前年度44億39百万円、16.0%の増)
▲	収支差引額	7億49百万円	(対前年度△3億10百万円、29.3%の減)



平成15年度 奈良県医師会学術奨励賞受賞者決定

本学の奈良県医師会学術奨励賞推薦委員会での審査を経て、推薦された次の3名の方が、奈良県医師会総会において表彰されました。

外科学第二講座	医員	西村 文彦
小児科学講座	博士研究員	松井 英人
皮膚科学講座	医員	井本 恭子

(総務課)

下ツ道 (編集後記)

編集後記のコラム名として“下ツ道(しもつみち)”を拝借いたしました。本学の東側を平城京から明日香まで南北に貫く古道幹線の呼び名です。佐藤先生(薬理学)からご提案をいただきました。一筋の道を求めることは大学人が忘れてはならないことです。さて本号から、将来計画委員会の検討状況を掲載することになりました。大学改革の動きは学内の組織とそれを運用するソフトウェアに迫りつつあります。本学報から読み取っていただければ幸いです。

編集委員

○山下 勝幸(生理学第一)	上田 恵子(母性看護学)
吉田 泰彦(英語)	南口 昌克(病院第一課)
水野 文子(細菌学)	柳沢 美穂(学生課)
吉田 克法(透析部)	大門 喜信(総務課)
植林みどり(看護部)	田中 章介(総務課)

(○印は委員長)